あって、来られて、皆さんが、万博の会場の中でも、レストランとか、いろんなところ、やっているところに関して分別するのがほんとうに大変だったんですね。というのは、彼らはわからないわけですよ。燃えるか燃えないかということに対してあまり認識もないですし、そういう状況の中で、皆さん、すごい悩んだんですけど、後になってから、これはいいアイデアだと。ただし、やはり国の発展度合いによっては、ちゃんと自然に戻る素材で生活している国の人たちは、別にそんな分別をしなくても、ちゃんとまたネーチャーに戻るわけですよね。ですから、そういうごみの問題とかということではないんですけど、結構来られてびっくりしていた方々の中に、私はとても意外だったのが、中東から来られた方だったんですね。それもやはり石油にある国だったんですけれども、その方が、NEDOパビリオンの代替エネルギーといいますか、再生化のエネルギーに大変関心を持たれていて、それで、ここのパビリオンは、万博会場の中からのごみから出ているメタンガスと、あとは太陽光発エネルギーと太陽電池を使って、それと、またそれを混合させて形で、こうやって私たちは新しいエネルギーをつくっていますと。ごめんなさい、石油を使わないでと言ったら、いいんですよと。もうそろそろうちも石油が尽きる時期になりますから、こういう考え方もいいですよというふうに言われまして、ですから、そういう点では、エネルギー問題とか環境問題ということが大きなテーマだっただけに、皆さん、非常に関心を持っていただけたのではないかと思うんです。

日本ってそういう点では、非常に資源というものがない国じゃないですか。ですから、やっぱり代替エネルギーというものを見つけて使おうとするということがすごく大事だと思いますし、おそらく日本のエネルギーのもとというのは、環境とすごく密接していたのは、『桃太郎』の話で、おじいちゃんが山に芝刈りに行って、おばあちゃんが川に洗濯に行ってと。川で洗濯をすると、もちろん水は汚れたりしますけれども、そのころ石けんはなかったから、きっと環境にやさしかったでしょうし、あと、芝刈りに行くということは、松葉を拾って、それを燃料に使っていたわけじゃないですか。そういう松葉を使わなくなってしまって、どんどん日本の森がだめになり始めてしまって、今、愛知県の地域の中で50歳になってしまうような植林してきた木があるんですけれども、その木を結局切るためにはお金がかかって切れないような状況で、それで切ったところで次はどう使うのかということにもなるので、そういう点で、やっぱりもう一回万博をきっかけにして、地元のそういう自然の資源をどのように新しいエネルギーにかえていくようにし、そしてなおかつ新しいエネルギーの技術開発というものも考えてもいいのではないかなという感じがしました。

**【小出氏】**　ありがとうございました。

ここまでが第１テーマというつもりだったんですけれども、非常に話が多岐にわたって、途中から私が話をとんでもない方向に持っていったりして、コーディネーターがコーディネートしないというようなので、大変調整しづらい話になったんですけれども、簡単に結論を申しますと、まさに21世紀というのは交流の時代に入ってきたんだと。これは、好むと好まざるとにかかわらず交流をしなければならない、せざるを得ない時代になったんだと。

その場合、交流という点では、やっぱり国際的な交流も決して無視できない。それから、基本的な交流は、国内では観光をするとか、そういう問題にも波及してくるであろうと。そういう場合に、愛知万博で学んだいろんな環境の体験とか、それから環境の問題というのは、ほんとうにそれぞれ国によってかなり違うのであるということを踏まえた上で考えていくというのも１つの手ではないかというのが、これまでしゃべってきた大まかなまとめだというふうに思っています。

第２項目は、これからのこの地方といいますか、中部地方というものを交流の面からどういうふうに魅力ある土地にで

きるんだろうかということを皆さんからお話を聞いてみたいというふうに思っております。

まず、観光でも国際競争力ということが言えるかどうか。国際競争力のある観光地づくりといいますか、外国の人たちがこの地方に来てみたいというような地域づくりというのは一体どういう方法があるんだろうかということを佐藤さんから伺ってみましょう。

**【佐藤氏】**　先ほどの映画なんですけれども、やはり21カ国から来た映画監督たちが一番注目するのが日本にしかない文化ですよね。お寺であったり、神社であったり、そういったものを大切にしている日本人の姿というものが映像の中にもたくさん出てくるわけなんですけれども、やはり外国人が何に興味を持つだろうなと思って自分の地域を見てみると、日本にしかない大変すばらしい文化がたくさんあるわけです。

今日は、この能楽堂の中でお話をさせていただいておりまして、こういうすばらしい文化を私たちはずっと持っているわけですから、さらにそれらに磨きをかけて、外国の人たちに、これが日本の文化だというふうに見てもらえるようにしていくこと、地域に眠っているかもしれない、そういう日本にしかないものにもう一度光を当てて見てもらうことがいいと思います。

21カ国の映画監督たちを受け入れた19の市町の自治体の人たちはいろいろ大変だったわけですね。監督が来た。自分のところが映画のロケ地になる、映画の舞台になるんだというふうに見ていかなくてはいけないわけですね。「どこへ連れていって撮影してもらおうと思って、自分の住んでいるところを見てみたら、地域にはほんとうにすばらしい資産がたくさんあることに気がついた」、というふうに言ってくれた方たちが多くて、私はとてもうれしかったんですけれども、日ごろ、何気なく生活している中でも、外国の人たちには、こんなところを大切にしているんだという、私たちの思いを伝えることができるところもたくさんあると思います。

居酒屋でもいいんですよね。居酒屋なんかも、外国の人たちを連れていくととても喜びます。また、あるアメリカ人はパチンコ屋さんに大変興味を持ちまして、パチンコはどういうふうにやるんだというふうに聞いてきました。といいますのも、町を行きますと、すごくネオンがきれいで気になりますよね。彼は実際にパチンコ屋さんに行きました。そして、「パチンコ屋さんは名古屋にたくさんあるから、僕、行ってみたよ。パチンコって禅の心に通じるね」と言ったんですね。「どこが禅の心なの？」と聞きましたら、「店内にはたくさん人がいる。そして、音楽もものすごくうるさい。でも、そこで『無』の気持ちにならなくてはいけない。玉の行方を見るともなく、見ないでもなく、そこに邪念を入れちゃいけないんだよ。入れ、入れ、入れとか願わないでいる。ずっと無心になっていると、たくさん玉が入る。あれは座禅の心に通じる」なんていうことを言っていました。何とか日本の文化とこじつけようとしているのかなというふうに思いました。その話を南山大学の宗教センターの所長をしている先生にお話しましたら、「佐藤さん、その通りだよ。パチンコ屋さんでパチンコをすることは、フェイク座禅だよ」、と彼は言いました。フェイクというのは、うそのということなんですけれども、にせの座禅につながる、という解釈でしたが、面白いと思いました。外国人の視点から見る日本の文化ですよね。

私たちの固有の文化として、外国の人たちに何を誇りを持って伝えていくことができるかということを異文化のまなざしも意識しながら、考えていきたいなと思います。何気なく見ている私たちの地域にたくさん宝があると思います。それを世界の人たちに発信しようという、その視線で見たときにその宝がよりよく見えてくるんだというふうに思います。

**【小出氏】**　ありがとうございました。

全くそのとおりだと私は思いますね。それで、外国の人に日本の文化とか伝統を知らせようとすると、もともと人間っ

てそんなに上等にはできていないんですよね。なぜか上半身の話ばかりする。そうすると、結局聞いているほうだっておもしろくないというので、この手のシンポジウムのテーマも、ほとんど人間は上半身でできているという前提で組み立てられているんですけれども、パチンコというのはやっぱり名古屋が生んだ文化ではないかと。その部分まで入れて、初めて本物が伝わるというか、よそ行きの顔だけの交流はどこまでもよそ行きだけで終わってしまうし、ふだん着の部分をちゃんと見せるというのがほんとうに大事だと思いますね。僕はほんとうに大賛成ですね。

間違いなくパレスチナの彼にも、それじゃ、パチンコ屋へ連れていこうと思っていましたね。そういう部分がほんとうに大事だと思います。というので、これは名古屋の魅力ある土地、名古屋の目玉がパチンコ屋でもちょっと寂しいんですけれども。でも、どうやったらこの地域を美しく知ってもらえるかという点についても、マリさんから、外国の例と比べて、このあたりはどうだとかいうようなお話を願えますか。

**【クリスティーヌ氏】**　ほんとうは須田さんの分野じゃないかと思うんですけど、先ほど申し上げましたイギリスのナショナルトラストというところは、制度としてすばらしいのは、日本と何が違うかといいますと、税制優遇措置が違うんですね。ですから、このイギリスナショナルトラストに自分が持っている、例えば農地とかお城、もちろんお城はあんまり日本に個人で持っている方はいませんけど、もともと代々持っていたお城を寄附するとか、ちゃんと管理できなくてということで、それこそ先ほども言いました、村ごと、工場ごと寄附するとかとなると、そこで税金を払わなくても済むと。

だけど、そのかわり、それをちゃんと保全していってくれて、自分たちの国の文化遺産としてずっと保全できると。

産業観光というと、何か機械が動いているというふうなイメージがあるんですけど、産業というのは、小さな工場の中で手づくりでしているものからスタートすると思うんですね。例えばからくり人形というのが、私はほんとうにどう見てもパチンコほど飽きないんですよね。ですから、やっていればやるほど、ずっと目を追っていくような感じで、後ろの機械のメカニックがすばらしいんですね。ですけど、その技術というのは、糸よりの技術から、木を彫る技術から、漆塗りの技術から、人形の顔をつくる技術から、すべてその技術が一個一個あって、それがワンセットになってからくり人形という、今のロボットの原型だと思うんですけど、そういうものを見ることができる観光というのはすごくすばらしいんじゃないかと私は思います。外国の方にも、日本人の方にも、すごく興味を持っていただけるので。

イギリスやアメリカもそうですけれども、ウイリアムズバーグみたいな古い町に行くと、1700年代の当時と同じような生活の仕方をみんながそこでちゃんとやっているんですね。明治村みたいにただ出かけていって見るだけではなくて、ほんとうに中に入って、自分も１つの体験としてそこで何か学んだり。トラストのすばらしさというのは、このボランティア活用であって、そこに出かけていって、新しい人と出会いたい人とか、または新しい技術を学びたい人、例えば湖水地方へ行ったときに、壁がどんどん腐敗して壊れてしまっているんですね。それをもう一回積み直す技術というのは、昔からストーンメイソンといって、石屋さんがやるんですね。ただ、その石積みの技術がどんどんなくなってしまって、ボランティアの方にそれを教えて、その技術を学んで、自分のロンドンのおうちに持って帰って、自分の庭園にその技術を使うと。

だから、単なる一方的な交流ではなくて、行って、学んで、持って帰って、また自分のところでそれをもう一回再認識しながらまた広めていくという、そういう交流というのはすごく大事で、こちらの中部地区というのは、ほんとうにそういう点ではそういうたくさんの学べる場があるので、それをもっと活用していってくれるとうれしいなと思いますね。

【小出氏】　ありがとうございました。

須田さんからは、この地域の魅力ある土地づくりといいますか、地域づくりという点で、地域のそれぞれ連携とか、それからそれぞれの地域の特殊性、自立とかいうような観点からお話を願えますか。

【須田氏】　２つほど申し上げてみたいと思うのでありますが、１つは交流、特に観光でも同じだと思いますけれども、広域的な、なるべく幅の広い交流をする努力をしなきゃいけない。特に、中部というのは日本の真ん中でございますから、そういう日本の真ん中にふさわしい地域として、いろんな人々とアクセスしやすい場所ですから、それを考えなきゃいけないと思います。

観光を例にとりますと、従来、ともすれば、都道府県、市町村単位といいますか、行政区画単位で観光が行われておりました。きめの細かい観光という意味においては、それはこれからも必要かと思いますけれども、人々の行動半径がものすごく広がっているわけですから、みんな車を持っているわけですね。新幹線も飛行機もあります。それと、観光の単位とがどうも合わなくなってきている面があるんじゃないかと思います。

したがって、交流というのも、そういった限られた範囲ではなしに、できるだけ幅の広い地域との交流、もちろん国際も含めてでありますけれども、そういうことをやっぱり考えていかなきゃいけないのでありますから、観光も、点と線の観光ではなしに、ゾーンすなわち、面の観光に広げなきゃいけないんじゃないかなと思います。

もう一つは、この中部独特の問題として、この地域が万博の開催地域であったということであります。私は、これは開催地域の責務ではないかと思うのでありますけれども、今度の万博は成功いたしました。私は、その成功というのは2,205万人が来たことだけでは必ずしもないと思います。

今度の万博が成功したというのは、その数字ではなしに世界の人々との交流が見事に表現できた、これが１つ。もう一つは、環境と向かい合うことができた。この２つが万博の大きい成果だと私は思います。毎日のようにナショナルデーが開かれました。世界121カ国ですか、国と地域の方が集まって、毎日そういった方々の交流が行われました。ほとんどの国は、私どもが行ったこともなければ見たこともない、もちろん場合によれば聞いたこともないような国の方々と、文字どおり一堂に介して交流の輪が生まれた。私は、これは大変な資産を残したと思うのであります。それをこの中部の人は、文字どおり地元の市民としてその中に参加したわけですね。

したがって、そういったものを主催した地元としては、この効果をこれから長く持続させなきゃいけないという責務があると思うのであります。先ほど佐藤さんからお話がありましたフレンドシップ事業で、21カ国の人が集まって映画をつくって、そのコンクールをやって触れ合われたという話がありますけれども、こういうことをいろんな分野にわたって毎日のように繰り返していくことによって、初めて万博の心というものは定着していく。それが、この地域のこれからの交流を考える場合に、私は、非常に大きな重要なことではないだろうかと。万博の成果を今後にいかに生かすかということで交流を考えてみようと、その観点が中部には必要だと思います。

以上、２つの観点がありますけれども、その２つの面的な観光、面的な広がりのある交流にする、万博の心を生かした交流にするためには、幾つかの前提がそこにあると思います。１つは、もちろんそのためには交通インフラのネットワークができていなきゃいけない。国土交通省のシンポだから言うわけではありませんが、万博であれだけの交通インフラがつくられたわけですね。これをこれからうまく生かしていかなきゃいけない。

また、そのためには、道路とか鉄道とか港湾とか空港とか、そういうものが理想的な組み合わせで新しい交通システムとして機能していかなきゃいけない。それをさせることができる素地は大体できているように思うのでありますが、我々がそれを仕上げて、交通ネットワークというものを、ここで大きな全国の模範的なものをつくらなきゃいけない。それが１つの前提だと思います。

２番目には、交流マインド、交流する心、観光する心でもいいんですけれども、そういう気持ちをみんなの人が持って触れ合わなければ交流の輪は広がらないと思います。ただ「こんにちは」では困るわけでありまして、これからこういった人々と仲よくしていこう、またその人々を通じて、ほかの国

の人々とも、あるいはよその人々ともいうふうに、交流マインド、交流の気持ちを持って、これから我々は日常の行動をしていかないとなかなか交通の輪が広がっていかない。その気持ちをこの地域の人がすべて持つことが２番目の前提だと私は思います。

３番目の前提としましては、先ほど申し上げた万博の心というものをいつまでもこの地域に残しておいて、それをいつまでも我々が心の中に置いて、その万博の心をこれから生かすような努力を毎日続けていく。交流の場は、万博の心を生かす意味において広げていく、こういうことではないかと思います。言いかえれば、「万博の心を中部にいつまでも」。ということです。そして、交流する心、交流マインドを持って、そして整備された交通ネットワークを生かして、これから交流をするには日本で最も恵まれた地域であると私は思います。それだけに、また最も恵まれた地域であるこの地方の責務が、責任がその交流の輪を広げることにある。我々一人一人がそういう考え方を持っているということを考えて努力していかなきゃいけない、こんなふうに思います。

ありがとうございました。

**【小出氏】**　ありがとうございました。大変印象的なお話でした。

この項目でのまとめといいますか、論点というのは、須田さんから今言われた、万博の体験をもとにした、そこからさらに発展させて、常に交流をするという意思といいますか、そういう心を持って、それで他の地域の方とももちろん、それから外国の人たちとも、それを受け入れる交通インフラの整備、それから片一方では、パチンコの例のように、もっとふだん着で交流すればいいということと、それから、マリさんのお話も非常に印象的だったのは、例えば日本における観光というのは、お役所はほとんど観光と経済とくっつけております。観光を所管というのはずっと経産省がやっていた。それから、愛知県だと商工部商工観光課というのがあります。名古屋市だと名古屋市経済局商工観光課。だから、商工業と観光というそろばんをはじくのと観光がくっついていたというのがずっと長い伝統で、でも、マリさんが言われたのは、観光というのをもっとそろばんから切り離して、環境だとか、

あるいは自然遺産とかというもの、商業、工業というものからちょっと切り離して考えるというのが、諸外国というか、欧州の基本的な考え方であるというような意味合いが含まれていたと思うんですけれども、常に観光というと、観光名産とか、どうやって土産物を売るかというのは、それも大事なんだけれども、それから一たん切り離す観光の考え方も非常に大事ではないかというようなお話がありました。

そんなことで、この地域は、ほんとうに国際競争力、間違いなく潜在的な財産としてはすごくあると思うんですね。北アルプスというものすごいすばらしいきれいな山があり、それから伊勢志摩、太平洋というすばらしいきれいな海があって、世界でも、これほど高い山と、これほどきれいな海が、これほど近接してある国は多分日本しかないと思うんですけれども、川の長さが日本は非常に短い。木曽川がせいぜい370キロぐらいですかね。信濃川は、一番長いといっても四百何十キロ。普通ヨーロッパの川というのは、ライン川は5,000キロとか、ドナウ川は8,000キロとか、山から海までが遠いものだからだらだらに流れるわけですね。ちっともきれいじゃないわけですよ。長江とか黄河というのは、もっと１万キロぐらい流れているものだから。

日本の川だけは、高山と海が近いものだから清流で、大きな川でもせいぜい三、四百キロ。実にきれいに流れる川というのは、その川がまたこの周辺にいっぱいあるわけですけれども、そういう自然景観というのは多分世界でもほとんどないと思うんですけれども、3,000メートル級の山ときれいな海がこれほど近距離で接近しているという国は多分日本しかないと思うんです。そういう財産をもっと生かすという手もあるんじゃないかというふうに思います。

これまでにこの地域をどういうふうにしようか、それから交流の時代にどうあるべきかというようなお話を伺いました。それで、これまでのご意見の中で、ちょっとだけ私も感じたんですけれども、交流というのは昔から確かにあって、人間は単独ではなかなか生きられなかったんですけれども、それでも近代になってからは鉄道というものが生まれて、それで劇的に交流が激しくなって、これは柳田國男という民俗学者の調査でわかったんですけれども、現在から見ると、見合い結婚というのは非常に古臭い、恋愛結婚が一番新しいとかという妙な間違った観念があるんですけれども、鉄道が生まれる前までの日本というのは、ほとんど恋愛結婚か、村の娘と息子は昔からいいなずけだと。見合い結婚がなかったんですね。

それで、鉄道が生まれて、通婚圏が広がって、それで見たこともない男が村に来たぞということになり、どうや、うちの娘というので、お互い紹介するようなので、これは明治末から大正初めから全国津々浦々、庶民に至るまで見合い結婚というのが始まったわけですね。そのぐらい見合い結婚の誕生というのは、多分近代日本におけるある種の交流、人的が交流が生んだライフスタイルの変化だと思うんですね。

それまでは、ほとんどは、アイちゃんはタロウの嫁になるというふうに昔は同じ村で決まっておったわけですね。この通婚圏の拡大によって、日本人が劇的にわっとまざっていった。それで、まざっていって初めて、愛知県は愛知県ばかりで生きておるとかそうじゃなくて日本国になったと思うんです。交流というのは、そのぐらい劇的な文化の変化を生むと思うんですけれども、そういう起爆剤を務めた鉄道の親分であります須田さんに伺いたいんですけれども、これからの新しい時代の交流というのは、日本人のライフスタイルにとってどんなものを生んでくるというふうに考えられますかね。

**【須田氏】**　見合い結婚というものが鉄道でできたというお話がありましたね。恋愛結婚も、鉄道があるからこそ破綻せずに結婚に結びついたということがあると私は思うんです。シンデレラエクスプレスキャンペーンというのをJRでやったことがあります。単身赴任の人が今非常にたくさんいるんですね。

そういたしますと、今まで学校を出て、せっかく恋愛関係になっていて仲よくしていた人が、どちらかが遠方に転勤をいたしますと、それで縁の切れ目なんですね。ドラマを見ていると、そういうことがよくあります。その男女が現地の男女と親しくなって、今までせっかく仲よくしていた人と別れるという話はドラマの中でたくさん出てきます。

ところが、新幹線ができて便利になったものでありますから、そういった単身で行った人がすぐに週末には帰ってこられるようになった。したがって、週末の日曜日に、またもとの赴任先に行く人々との別れが東京駅の駅頭であるわけです。単なる演技ではありません。私は、実際見たのですから。私は、最終列車でこちらへ東京から戻るときに、私の隣に、幸い間に１つ席があいていたからよかったんですが、一席置いて隣に女性が座っておりました。東京駅を出るときに、その女性の恋人とおぼしき人が、列車が走り出しているのにずっと列車に沿って走っているんですね。その女性は別れて泣いておりました。ずっと泣いていました。静岡を過ぎるまで泣いていました。１つあいていてよかったんですね。隣に座られたら私が泣かしていると思うから。

そういう人がたくさんいるということを、私、あのときに知りました。したがって、あのシンデレラキャンペーンの企画が来たときに、私はあれだと思いましたね。今もありますが、正直なところ。夜の列車の数が増えたものですから、当時の21時発という１本だけじゃないものですから、分散していますけど今もあります。それはなぜかというと、交通機関が便利になったために、今、小出さんがおっしゃったように、見合い結婚が遠くの人々と成立すると同時に、今度はまた遠くの人々の間で、これまでなら別れたかもしれない恋愛が息

を吹き返しているんですね。交通機関というのはおもしろいものだなと私は思います。

ということは、どういうことかというと、交通機関というのは心を運んでいるんですね。心を運んでいるという気持ちになって列車ダイヤをつくったり、最終的にはそういう列車が遠隔地の人々の距離感を感じさせなくなる。それが今の交通機関だと私は思うのであります。昔は、大阪まで、夜行で行く距離でした。昼間の列車は８時間かかったわけですから。今は２時間半で行くわけですね。そうなると、距離感が変わる。そうすると、そこにまた新しい結婚観が生まれ、恋愛結婚が生まれ、先ほどのライフスタイルが生まれます。

したがって、交通は今そこまで来ているだろうと思います。新幹線は味気がないとよく言われますけれども、私は、高速交通はやはりこれからの世の中における交通の大きい意味じゃないだろうかと。やはり距離感を少なくすること、これはどんなになっても大事だと私は思うのであります。そういう意味合いで、これからも交通機関は距離感を少なくするために働いてまいりたいと思います。どうかひとつ皆さんも、これから恋愛をなさる方はいないかもしれませんが、やるのだったらひとつ新幹線の沿線でぜひお願いしたいと思います。

**【小出氏】**　ありがとうございました。

須田さんという方は、おもしろい人というか変な人で、JR東海の社長や会長をされていたときも、新幹線は断固として普通車自由席しか乗らなかった人です。それで、通常はグリーン車に乗るんでしょうけれども、絶対に乗らない。だから、やっぱり普通の自由席に乗るからそういう哀歓がわかるわけですよね。グリーン車に乗ると、そういうドラマはわからんですわな。

というので、皆さん、ぜひ自由席に乗りましょう。と言うと、JRの売り上げが落ちますけれども、そのぐらい楽しい列車という感じがします。

それと、今までの国際交流で、佐藤さん、あちこちの知事さんとか市長さんが言うので、国際都市名古屋と非常に安易に使われるときがあるんですけれども、僕は、世界中で国際都市というのは、多分ニューヨークとロンドンとパリしかないと思うんですけれども、どうしてかというと、この３つの都市は、自分が住んでいる隣の人が違う国の人、隣がギリシャ人、その隣がドイツ人、その隣がオーストラリア人。町内会をやると、オリンピックができるぐらい違う国の人たちが住んでいる町を国際都市というのであって、東京なんていうのは、単なる国際色豊かな都市にすぎないので、向こう３軒両隣、ほとんど日本人ですから。

だから、ほんとうの国際交流というのは、先ほどのパチンコじゃないんですけど、ふだん着の部分でつながっているというと、僕は、国際都市とまでは言わないけれども、この地域に国際村みたいないろんな国の人たちが住む地域、そういう特区をつくったらどうかなとかねがね思っているんですけれども、そうすると、30カ国ぐらいの民族の人たち、世界では結構あるわけですけれども、日本中に全くないですから、そういう地域をつくったら、それこそほんとうの国際交流というか、世界というのはいろんな物差しで生活しておるなという多様性がわかるし、彼らの理解も深まるしという感じがするんですけれども、この構想はどうですかね、佐藤さん。

**【佐藤氏】**　とてもおもしろいと思います。愛・地球博は、世界の国々から多くの外国人が万博の会場にやってきたわけなんですけれども、でも、その万博というビッグなイベントが終わってしまったら、いろいろな国の人たちと交流ができないということはないんですね。できなくないんです。といいますのは、小出さん、愛知県には20万人の外国人が住んでいます。それも、国籍数何カ国ぐらいの人が住んでいると思われますか。愛知県に住んでいる外国人ですよ。

**【小出氏】**　10ぐらいですか。